

近世における文字文化の地域的浸透

十八世紀前半における越後の俳諧文化と関連して

八楸友広

The Regional Spread of Literary Culture in Early Modern Japan: Connecting with the Culture of Haikai in Eighteenth Century in Echigo Province

- ① 近世社会と文字文化
- ② 越後・佐渡の近世俳諧
- ③ 佐久間家と「俳諧留」
- ④ 「俳諧留」にみられる十八世紀前半の俳諧文化
まとめ

【論文要旨】

本稿は、十八世紀における越後地域の俳諧文化の実態を検討することによって、文字文化の地域的な浸透の一面を明らかにしようとするものである。

越後蒲原郡佐久間家の「俳諧留」は、正徳期から寛保期における多数の俳額および歳旦帳を記録したものである。これまでの俳諧史研究においても十分には解明されていない、十八世紀前半の俳諧文化の地域的な実態を知り得る、きわめて貴重な資料といえる。

「俳諧留」の分析によって、各地の社寺への俳諧の奉納が、十八世紀前半の時期からきわめて活発におこなわれていることが明らかとなる。二千句をこえる俳句が投じられた奉納もあり、すでにこの時期に、濃密な俳諧文化の浸透があったことが確認される。

越後佐渡における俳人については、各地の句集に掲載される俳人をまとめた「越後俳人名索引」(『近世越佐の俳書 第一巻』一九九八)があるが、「俳諧留」には、これ

に掲載されない俳人が多数登場する。句集などには登場してこない多数の俳人が、地域の中に存在したことがわかる。その中には、「盲人」、「遊女」、「少人」などの肩書きを有するものもあり、女性も十五人ほどがみえる。

入集した俳人の地域的分析から、俳諧奉納のネットワークには、三段階ほどのパターンが存在したことが見いだされる。奉納先社寺近隣の地域の俳人が中心となったもの、下越地域一帯から寄せられたもの、全国から出句されているものなどである。

俳額の奉納は、奉納地近隣地域の俳人たちによって開催されるものであったが、俳人によっては、奉納のたびに入集している者もあった。もちろん、投句しても必ず選句されるとは限らないから、俳人たちは、奉納の機会をとらえて活発に投句した。こうして俳額奉納は、創作された俳諧を発信するメディアとしても、重要な役割を果たしていたのである。